



1 概況 ～ 歴史ある梅と華麗な桜が咲き誇る里 大河原町 ～

阿武隈川水系白石川の盆地に位置する大河原町では、平安時代に陸奥守として下向した藤原実方が「鶯の訪ひこぬ里の 梅の花 摘みてぞ知れん 梅の操を」と詠み、後に「梅が枝莊」とも呼ばれるようになったと伝えられています。梅は町の特産品として「町木」に指定されています。また、蔵王連峰を背景に白石川堤に華麗に咲き誇る桜並木「一目千本桜」は、国内だけでなく世界各国から多くの観光客が訪れる絶景として有名です。

「大河原」の地名の由来は、往古、白石川が刈田郡境の金ヶ瀬付近で分流し、一つは西北の新開橋本付近を迂回し、他は東南の大谷を東流してこの地で再び合流したので、

逢河原(あうかわら)とか大河原と称したものとされています。江戸時代になると奥州街道の宿場町となり、米や紅花の集積地として栄え、また、仙台藩の直轄地として、代官所や藩主の宿泊施設であった御飯屋が置かれていました。

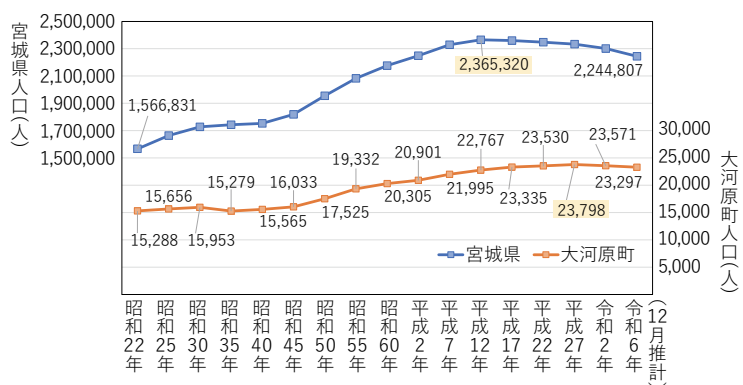
明治時代以降は、地理的に仙南地域の中心部に位置することもあり、明治11年に柴田刈田郡役所が設置されるなど、国や県の出先機関が置かれる仙南地域の官庁の町として発展してきました。明治22年の町村制施行に伴い、大河原村、小山田村、大谷村、福田村の計4か村が合併して大河原町が発足、昭和31年には大河原町と金ヶ瀬村が合併し、現在の大河原町となりました。

2 基本情報 ～ 仙南地域の商圏形成地と仙台通勤圏の二面性を併せ持つ街 ～

大河原町の面積は、県内32位となる24.99km²です。直近の令和6年12月の推計人口は23,297人となっています。仙台市の通勤・通学圏にもあり、平成27年頃までは徐々に増加傾向でしたが、令和2年以降はわずかに減少も見られます。社人研(国立社会保障・人口問題研究所)によれば2050年には^[1]19,966人(対2020年▲15.3%)に減少すると推計されています。

大河原町の高齢者(65歳以上)人口比率は27.9%(令和2年国勢調査)と県平均の28.3%を下回っています。社人研の推計では2050年は39.2%とされ、10%以上の上昇が見込まれます。また、生産年齢(15～64歳)人口比率も、令和2年時点で59.1%ですが、2050年には人口比率で51.0%に低下、同じく人数では26.2%(令和2年比)の減少が見込まれています。こうしたこと

図表1 宮城県と大河原町の人口推移



から、少子高齢化対策や働き手の確保は大河原町にとっても重要な課題となっていくでしょう。

また、昼夜間人口比率^[2]は93.75(令和2年国勢調査、県内20位)と低く、大河原町民の町内での通勤・通学者の比率は43.2%(県内31位)と半分を切っています。仙台市(通勤者流出率10.8%)、柴田町、白石市などへの流出数が、柴田町などから大河原町への流入数を大きく上回っています。大河原町は、仙南地域での交通利便性の高さから、「えずこホール」^[3]が立地するなど、商圏人口167千人を擁する仙南地域で唯一の地域型の大河原商圏を形成する中心地^[4]ですが、町内での魅力的な働く場所の確保が更に必要と思われます。

大河原町では、平成30年度に策定した「第6次大河原町長期総合計画」に基づき、「ひと・まち・桜が咲きほこる 先進のまち」を将来像に、「おおらかに、たくましく未来へ続く おおがわら」をキャッチフレーズとして、令和11年度までを計画期間として、その実現を目指して各種施策に取り組んでいます。

また、第6次長期総合計画「前期基本計画」が令和5年度で終了したことから、前期の政策・施策の評価・検証と課題及び住民ニーズ等の再確認を行い、まちづくりの前進に向け改めて政策の基本方針、施策の方向性、目標指標等を示す「後期基本計画」を策定、令和6年度からスタートさせました。第6次の長期総合計画で示したまちの将来像、キャッチフレーズ、政策の基本方針は大きな変更をせず、まちづくりのコンセプト(大切な視

3 産業の状況

(1) 町内総生産 ～ 保健衛生・社会事業、製造業、卸売・小売業が牽引 ～

令和3年度の大河原町の町内総生産額は831億円と、県内35市町村中20位ですが、人口一人当たりでは18位となります。産業別(図表2)では、「保健衛生・社会事業」が127 億円と最も多く、「製造業」114億円、「卸売・小売業」109億円が続きます。

産業別生産額の構成比を宮城県と比較すると、大河原町の構成比が宮城県の構成比を上回るのは「保健衛生・社会事業」「公務」「その他サービス」等で、下回るのは「製造業」「卸売・小売業」等と総生産上位を占める業種も含まれており、大河原町の生産活動面での弱さも窺われます。更に県平均を下回る業種には「教育」「専門・科学技術、業務支援サービス業」等も含まれます。

図表3に示す通り、大河原町の最近11年間の町内総生産額をみると、平成23年度の771億円に対して平



(写真)えずこホール(筆者撮影)

点)に関し、「Well-beingなまちづくり」、「地域共生社会の実現」、「スポーツを活用したまちづくり」の3項目を今後の重点に置くことにしています。まちづくりの視点には、新たに「スポーツと賑わいの拠点となる交流空間づくりの推進」を追加しました。更に、各政策とSDGs(持続可能な開発目標:Sustainable Development Goals)とを関連付け、環境への配慮や「誰一人取り残さない」などの意識を踏まえながら、まちづくりを推進することとしています。将来人口(後期計画終了時:令和11年)の目標人口として23,122人の確保を目指しています。

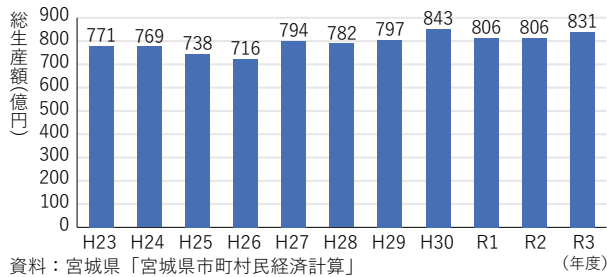
[1] 国立社会保障・人口問題研究所(社人研)が2023年12月に公表したデータによる。
 [2] 昼夜間人口比率とは、夜間人口100人当たりの昼間人口。
 [3] 大河原町ほか仙南地域9市町で構成される仙南地域広域行政事務組合が設置、管理・運営する音楽・演劇を中心とするホール等を有する仙南芸術文化センター。愛称の「えずこ」とは、東北地方で“乳児を育てるために使ったワラ製のかご”のことで、「地域文化を創造するゆりかご」との願いが込められており、その特徴的で雄大なフォルムは茅葺屋根の民家や「えずこ」がイメージされている。
 [4] 宮城県の商圏 消費購買動向調査報告書(令和4年3月)による。

図表2 大河原町の産業別町内総生産額（令和3年度）

	実額(億円)		構成比(%)		
	大河原町	宮城県	大河原町(a)	宮城県(b)	(a-b)
第一次産業	4	1,118	0.5	1.2	-0.7
農業	4	710	0.5	0.7	-0.3
林業	0	64	0.0	0.1	-0.1
水産業	0	344	0.0	0.4	-0.4
第二次産業	171	23,504	20.5	24.4	-3.8
鉱業	0	126	0.0	0.1	-0.1
製造業	114	16,597	13.7	17.2	-3.5
建設業	57	6,781	6.9	7.0	-0.2
第三次産業	658	71,989	79.1	74.6	4.5
電気・ガス・水道業・廃棄物処理業	21	2,737	2.5	2.8	-0.3
卸売・小売業	109	14,748	13.1	15.3	-2.1
運輸・郵便業	29	4,342	3.5	4.5	-1.0
宿泊・飲食サービス業	16	1,293	1.9	1.3	0.5
情報通信業	15	3,206	1.8	3.3	-1.5
金融・保険業	33	3,055	4.0	3.2	0.9
不動産業	94	12,025	11.4	12.5	-1.1
専門・科学技術、業務支援サービス業	62	8,747	7.4	9.1	-1.6
公務	80	5,476	9.7	5.7	4.0
教育	20	4,077	2.4	4.2	-1.8
保健衛生・社会事業	127	8,750	15.2	9.1	6.2
その他のサービス	51	3,534	6.1	3.7	2.5
総生産額	831	96,496	100.0	100.0	0.0

資料：宮城県「令和3年宮城県市町村民経済計算」
(注) 税加除等により各業種の計と合計は一致しない

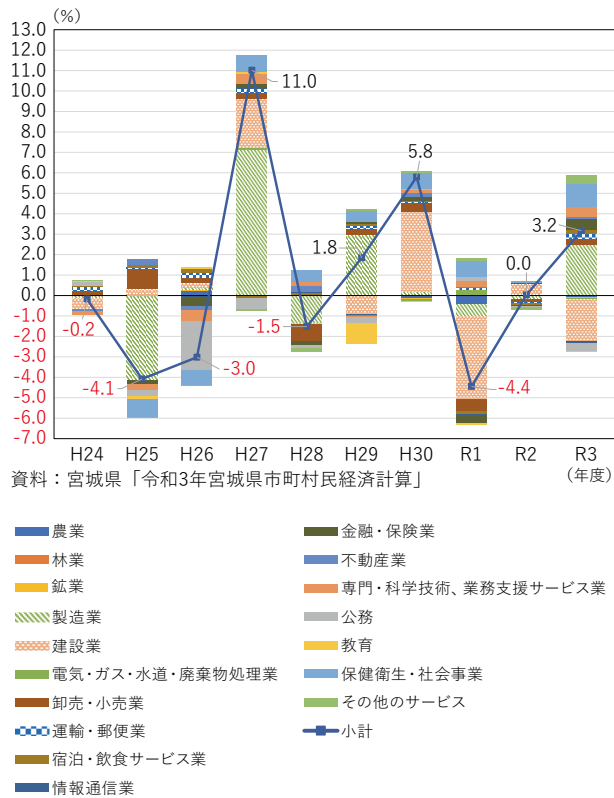
図表3 大河原町内総生産額の推移



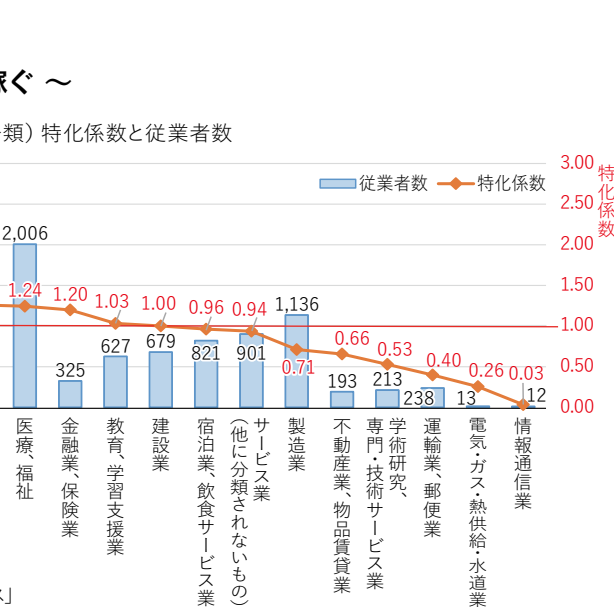
(2) 産業構造 ～ 小売業、医療、福祉などを中心に稼ぐ ～

図表5、図表6は、大河原町の産業構造を把握するために従業者数による特化係数^[5]を算出し、産業別の従業者数とともに表示したものです。最も従業者数が多く特化係数が1を超えている業種(大分類)は「卸売業、小売業」(特に小売業)、次いで「医療、福祉」「建設業」「公務」です。特化係数は1を割込みますが、従業者数が多いのが「製造業」「サービス業(他に分類されないもの)」「宿泊業、飲食サービス業」(特に飲食店等)です。図表6は、従業者数が多い「製造業」「卸売業、小売業」等について、更に中分類等の業種別内訳を見たものですが、「小売業」の従業者数の多さと、従業者数は多くないものの「非鉄金属製造業」等

図表4 大河原町内総生産額の業種別対前年比の推移



図表5 大河原町の業種別(大分類) 特化係数と従業者数



の一部製造業の特化係数の高さが際立っています。すなわち大河原町で「稼ぐ力」が大きく、かつ雇用も吸収しているのは「小売業」「医療、福祉」「飲食店等」「建設業」「公務」などであることが分かります。一方で

「不動産業、物品賃貸業」「学術研究、専門・技術サービス業」「運輸業、郵便業」など、一部の生活系・業務系業種の特化係数は1を大きく下回っており、大河原町の都市・産業機能の一定部分が仙台市や近隣自治体に依存する状況になっていることを示しています。大河原町は、産業面からも「公務」(行政機能)や「医療、福祉」「小売」が強く、仙南地域の中では利便性が高い地域としての特徴を示していると言えます。

なお、大河原町における「農業、林業」の町内総生産額に占めるシェアは県平均を下回っていますが、183の経営体(個人・法人)、実人数は462人(うち60日以上農業に従事した人数は215名)(2020年農業センサス)、特化係数は1.26となっています。令和4年の推計^[6]によれば農業産出額は県内26位

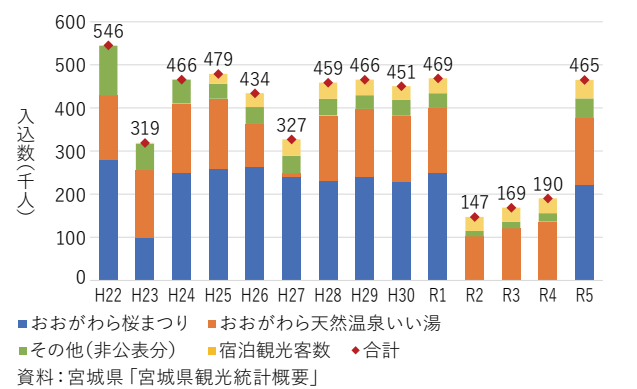
[5] 特化係数とは、当該市町村における産業別の生産額や従業者数の割合を全国の同様の割合で除した指数のことです。この指数が1を超える産業は、域内での生産物やサービスの金額や量、従業者数が域外の平均値より多く、域外需要を取り込み域外からお金を「稼ぐ力」の強い産業」とみることができます。反対に、指数が1を下回る産業は、域内需要が域外に流出し、域外にお金漏れ出る産業、つまり「稼ぐ力」の弱い産業」とみることができます。
[6] 農林水産省による令和4年市町村別農業産出額(推計)(農林業センサス結果等を活用した市町村別農業産出額の推計結果)

(3) 観光 ～ 仙南地域の要として地域全体の底上げで飛躍を目指す ～

大河原町の観光入込数・宿泊観光客数合計の推移をみると、「一目千本桜」の開花時期に開催される「おおがわ桜まつり」や周辺住民の憩いの場「おおがわ天然温泉いい湯」を中心に令和元年までは概ね年間延40万人台で推移していましたが、令和2～4年は、新型コロナウイルス感染症拡大による桜まつりの中止が響き10万人台まで落込み、令和5年は桜まつりが再開されたことから延46.5万人にまで回復しました(図表7)。一方、令和5年の四半期別観光客入込比率を見ると桜まつりが開催される4-6月に約6割が集中していることがわかります(図表8)。

大河原町の観光を更に活性化していくためには、一目千本桜の関連企画で「桜」に磨きをかけることはもとより、桜以外のシーズンの町内観光資源の掘り起こし、延約670万人超(令和5年)の観光客入込数がある仙南地域全体での連携した取組みなどが重要となってきます。「一目千本桜」の知名度も活かしつつ、年間を通して誘客可能なコンテンツづくりや組合せ、物語性のある提案などです。例えば、「どぶろく特区」(平成

図表7 観光客入込数・宿泊観光客数の推移

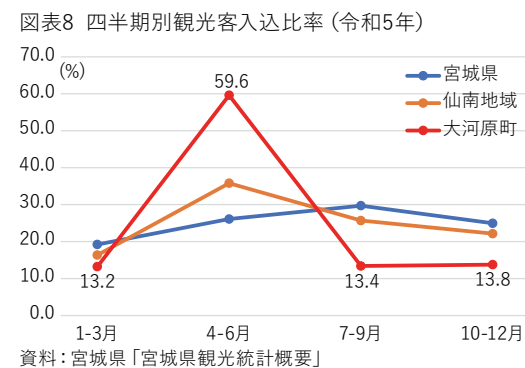


19年認定)で実現した農家レストランが醸す“どぶろく”「女桜」が平成22年には全国どぶろくコンテストで最優秀賞に輝くなどの取組み、仙南地域全体の取組みとしては「みやぎ仙南サイクルツーリズム」や「みやぎ蔵王ハーモニー花回廊」(令和4年4月ガーデンツーリズムに登録)などの活動も既に始まっています。全国的に有名な「一目千本桜」を核に相乗効果が発揮される様々な新たな関連コンテンツ(カラーコンテンツと

なり得る“飲食”やリピーターに繋がる“アクティビティ”等の開発により重層化・多様化し、大河原町にゆかりのある企業や関連自治体等とのタイアップなどによる誘客の仕組みや場（例えば道の駅など）づくり、SNSなども駆使した情報発信により、滞在時間を伸ばして観光消費増に繋げるか、リピーター・交流人口を増やし、更には移住者増にまで繋げていくかが今後の課題と言えます。



(写真)左:どぶろく「男桜」「女桜」、上中央:「梅まつり」一升餅盛り放題、下中央:冬の「おのがわら桜イルミネーション」と「さくらっきー」(出所:大河原町HP)、とんとんの丘もちぶた館本店とおのがわら天然温泉いい湯(筆者撮影)



《 町民らの想いと誇りが詰まった「一目千本桜」 》

蔵王連峰に残る雪の白色を背景に白石川堤に咲き誇るソメイヨシノを中心とした桜並木「一目千本桜」の風景は、桜のほんのりと赤みを含んだ淡い紅色が、白石川の澄んだ青色にも映え、この地でしか見ることのできない絶景として「さくら名所百選の地」にも選ばれています。「町花」に指定されている桜は、大河原町出身の実業家 高山 開治郎氏が大正

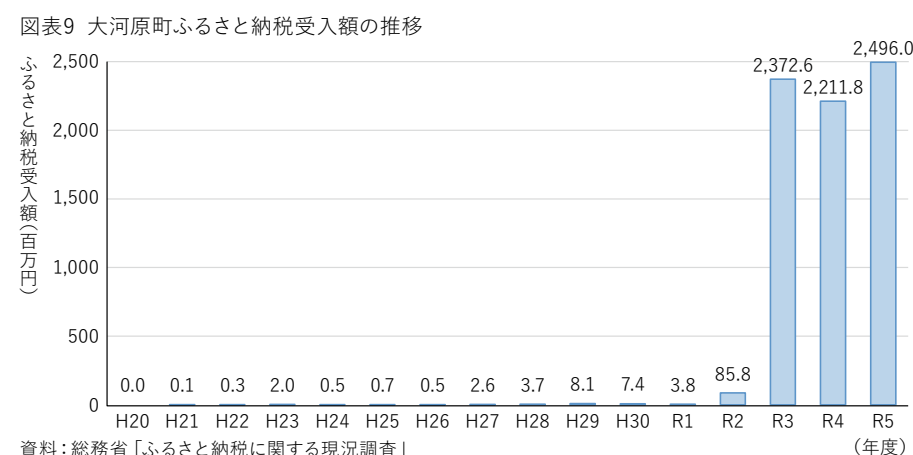
12年に約700本、昭和2年に約500本の苗木を町へ寄付・植樹したことに始まり、町民をはじめ、町内の中学や高校に通う生徒、経営者団体の会員、大河原町さくらの会会員など、多くの人々の手により、大切に育まれてきたものです。一目千本桜は、町民皆さんの想いと誇りがたくさん詰まった、大切な町の財産となっています。



(出所:大河原町HP)

4 ふるさと納税 ～ 更に魅力的な特産品開発と情報発信による受入増に期待 ～

大河原町のふるさと納税の受入額は、町内で生産される農産品や菓子などを返礼品としてきましたが、町内に工場のあるアイリスオーヤマの電化製品や雑貨・日用品などが大ヒットし、令和3年度以降は20億円以上となっています(図表9)。今後、一層の受入増を図るには、更に魅力的な特産品開発と情報発信が必要と思われます。一方、ふるさと納税の受入額については、子ども医療費助成事業などの少子高齢化対策、一目千本桜の保護、大河原中学校屋内運動場増改築事業、医療・福祉分野等、多方面において活用されています。また、企業版ふるさと納税については、既に大河原町での実績もありますが、引き続き、第2期大河原町まち・ひと・しごと創生総合戦略の3つの基本目標(①おおらかでたくましいひとづくり～まちを未来へ



とつなぐ～、②安全・安心のまちづくり～毎日安心が実感できるまち～、③まち全体のブランド化～だれからも選ばれるまち～)に沿った事業について、寄付の受け入れを募っています。更に令和5年11月には、企業版ふるさと納税の推進に関する契約を七十七銀行と締結し、民間企業の本制度の活用を促進するとともに、官民連携事業の創出等を通じた地方創生の推進を図ることとしています。

5 おわりに ～ ひと・まち・桜が咲きほこるまちづくりを ～

大河原町が長期計画の「後期基本計画」を策定するに際し、令和4年11月に行った住民アンケートでは、重点的に取り組むべき施策(必要度は高いが満足度が低い)として、①空き家対策の推進、②安全で便利な道路の整備と維持管理、③農業支援の充実、④災害対策の充実、⑤都市施設・公共交通の充実、⑥企業誘致の推進が上位となっています。アンケート結果や住民懇談会などを通じて吸い上げた住民の声を活かし、「後期基本計画」では、先述の通り、「Well-beingなまちづくり」、「地域共生社会の実現」、「スポーツを活用したまちづくり」の3項目を今後のまちづくりの重点とし、更に毎年策定される実施計画(3か年計画)や100を超えるKPI(重要業績評価指標:Key Performance Indicator)に落としこみ、きめ細やかに施策を展開しています。具体的には、①「おのがわら千本桜スポーツパーク」の魅力向上と普及促進、②妊娠

婦の外出を支援するママのおでかけタクシー券助成事業を新たに開始するなど「こどもまんなか社会」の実現に向けた様々な取り組み、③旧耐震の木造住宅を対象とした「耐震診断助成事業」及び「耐震改修工事助成事業」の強化、④梅、枝豆、たまねぎなどの特産品化への支援、⑤広域観光連携事業への積極的な参加、⑥家庭における再生可能エネルギーの更なる活用に向けた「次世代型住宅補助制度」の周知、⑦業務のデジタル化推進による住民サービスの質と利便性の向上などの様々な取り組みが進められています。こうした取り組みを通して先述の「ひと・まち・桜が咲きほこる先進のまち」「おおらかに、たくましく未来へ続く おおがわら」に向けた活動が今後も進められていくことが期待されます。

(文責 七十七リサーチ&コンサルティング 調査研究部 飯村 豊)